

男子高校生の試合で主審を務める高橋さん(奥)、日本ラグビー協会・河野大輔さん(提供)



女子審判 晴れ舞台

日本選手権で副審

ラグビーの女子レフェリーが、日本最高峰の舞台を踏んだ。52回目を迎えた今年度の日本選手権で、高橋真弓さん(28)が女性で初めて副審を務めた。

2月8日のサントリー―筑波大戦。高橋さんはフラッグを手にタッチライン沿いを走り、主審の判断を的

確に補佐した。試合後、サントリーの真壁伸弥主将が「(副審が女性だと)全然気づかなかった」と話したのは、褒め言葉ととらえている。

10歳でラグビーを始め、日体大やクラブチームでプレー。2010年に右膝の靭帯を痛め、リハビリ中に審判の勉強を始めた。地域協会主催の試合を担当できるB級資格を12年に取得し、すでに男子高校生の試合では主審を務めている。選手としては14年に引退した。

日本ラグビー協会によると、国内の競技人口は、13年度は約10万7700人(女子約3100人)。審判は全国に約4000人いるが、女子はまだ25人ほど。高橋さんは女性ならではの課題として、「威厳を持つこと」を挙げ、「選手につけ込まれないように、言葉遣いや振る舞いも意識している」と話す。

16年リオデジャネイロ五輪で7人制が正式採用され、「20年の東京五輪で主審を務めるのが夢」。晴れ舞台を目指し、研さんを積み毎日だ。